



第2回信楽まちなか芸術祭 10月1日(火)~20日(日)

期間中、まちなか会場、陶芸の森会場、信楽産業会館、信楽地域市民センターの各会場で、様々な「信楽」を見ることが出来ます。なかでも、信楽在住の作家や学生、一般の有志たちが、それぞれの感性のまま、思い思いに制作した大きな熊が100体以上も並ぶ様子は圧巻(信楽産業会館を中心とする十字の街道で、山手へ向かう信楽駅前通りと旧商店街)。この秋は、「陶とまち」に触れる旅をしてみませんか。

■お問い合わせ先
第2回信楽まちなか芸術祭実行委員会
TEL:0748-70-3304
<http://shigaraki-fes.com/2013/>



小川亭

「しがらきアート学び舎」体験プラン
信楽の土から学び、作家による作陶指導、歴史文化講座、小川亭に宿泊(食事付)。一泊二日(30,000円)〜選べるプランあり。個人、団体とも歓迎。
■お問い合わせ・予約
信楽たぬき温泉 小川亭 奥の里信楽の宿
TEL:0748-82-0008



昭和26年、昭和天皇の信楽行幸の際、戦後少なくなった住民の代わりに子どもの背丈ほどある狸の焼き物に目の丸の旗を持たせ、お道に並べてお迎えしたとのこと。昭和天皇は、後にこの出来事を短歌として詠まれました。(当時の様子伝える小川亭の書画より)

信楽へは 近江鉄道かお車で

JR貴生川駅より信楽高原鉄道へ乗り換え約25分で信楽駅へ。車の場合は、新名神高速道路の信楽ICより約10分で市街地へ。
第2回信楽まちなか芸術祭で100体以上の熊が並ぶ道は、信楽産業会館を中心とする十字の街道。



案内人
小河 文人さん
信楽たぬき温泉「小川亭」主人、信楽町観光協会の副会長を務め、信楽町の「まちおこし」事業に関わる。

「舎」を立ち上げました。信楽の奥深い歴史を体感しながら、風情あふれる「小川亭」でゆったり心癒すひととき。窯上がりの後には、「すき焼き」を食べて、夕食には近江牛のすき焼きが付いた会席料理を堪能し、密に散策路が一望できる展望露天風呂へ。「何度でも信楽へ帰ってきてほしい」と、プランは段階的に数種用意されており、大人の旅におすすめです。



知られざる幻の都

おとなの休日
Shigaraki
in しがらき

陶芸のまち 「信楽」

大人の探訪スポット



全国的にも知られる陶芸のまち、信楽。

平成12年、興味深いニュースで注目を集めました。

奈良時代の745年頃、聖武天皇により離宮として造営された紫香楽宮の宮殿跡が、信楽町の宮町遺跡で発見されたのです。

天災が続いたことで、わずか数年で都を移しますが一時、信楽は大仏建立も計画された日本の都だったのです。

当時の名残か、毎年2月に行われる奈良・東大寺二月堂の祭礼「お水取り」に使われる松明の藤蔓は信楽から寄進されています。

01 日本六古窯「信楽焼」 鎌倉時代より続く歴史

四方を山に囲まれる信楽は、付近の丘陵から良質の陶土が豊富にとれ、陶芸の歴史は遙か鎌倉時代にまで遡ります。平安・鎌倉時代より現在まで続く瀬戸焼、常滑焼、越前焼、丹波焼、備前焼とともに日本六古窯に数えられています。

土味は、焼成によって火色をベースに青緑や黄色のビードロ釉の味わいを残す特有の趣があります。耐火性に富み、大物づくりに適していたため、かつて重用された火鉢や甕は全国85%もの生産高を誇っていました。生活様式の移り変わりに伴い、植木鉢や傘立て、そして食器へと、主な生産物も暮らしに根差した焼き物へと変化を遂げています。

02 老舗旅館の挑戦 「しがらきアート学び舎」

「昔は山手に30以上のもの登り窯がありました」と話すのは、信楽で120年もの歴史を受け継ぐ老舗旅館「小川亭」の店主・小河文人さん。時代変遷とともに窯は減少、伝統産業を守り、信楽焼を後世に伝える。まちおこし活動を手掛けてきました。

近年、新しい試みとして、本格的に信楽焼を学び、実際に作陶体験し、地元作家たちと懇親を深める「宿泊型アートカフェ」しがらきアート学び